様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　７ 月　７ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２３４３

研究課題名（和文）中央アジア西部ポスト・クシャーン朝期（４～７世紀）壁画の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on wall paintings of Western Central Asia in the post-Kushan period (4th to 7th centuries A.D.)

研究代表者
影山　悦子（Kageyama, Etsuko）

名古屋大学・人文学研究科・特任准教授

研究者番号：２０４５３１４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：クシャーン朝にかわって、キダーラ、エフタル、西突厥が中央アジアを支配した時代（ポスト・クシャーン朝期）の美術の解明を目的とし、バクトリアとソグドの遺跡（現在のウズベキスタン・タジキスタン・アフガニスタンの一部）で出土した壁画からこの時代の資料を特定する作業を行った。研究開始当初はポスト・クシャーン朝期の壁画であると考えていたバクトリアのファヤズテパ遺跡の仏教壁画は、未発表の壁画をふくめて考察した結果、クシャーン朝期に遡る資料であると考えるに至った。そして、クシャーン朝期に確立した表現方法の一つが、その後、エフタル期まで使用され続けた可能性を実例を挙げて示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中央アジアで発見される壁画は年代が不明なものが多い。クシャーン朝時代（1世紀から3世紀）の美術については、ガンダーラ仏教美術の研究の蓄積があり、その特徴が明らかになっている。本研究はクシャーン朝滅亡後の中央アジア美術の解明を目的とし、その基礎となる研究として、4世紀から7世紀に制作された壁画を特定することを試みた。本研究により、クシャーン朝期に確立された表現方法には、6世紀のエフタル支配期まで使用されたものがあることを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：With the aim of identifying Central Asia art in the post-Kushan period, that is the period of the Kidarites, the Hephthalites and the Western Turks, we have examined wall paintings from archaeological sites of Bactria and Sogdiana, corresponding to present-day Uzbekistan, Tajikistan and Afghanistan. Through examinations of the original paintings including unpublished ones, we have concluded that the Buddhist wall paintings from Fayaztepa should be dated to the Kushan period instead of the post-Kushan period as we thought before starting this research, and that a way to represent human figures standing on the ground established in Kushan period could be used in Central Asia till the Hephthalite period.

研究分野：中央アジア文化史

キーワード：ソグド　バクトリア　エフタル　仏教壁画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)「ポスト・クシャーン朝期」という時代区分

１～３世紀までガンダーラを中心に北インドから中央アジアのほぼ全域に版図を広めたクシャーン朝が、支配地域の宗教、芸術の発展を促したことはよく知られている。最近の研究では、クシャーン朝崩壊後も数世紀にわたりその影響が持続したことが明らかにされつつある。本研究では、ガンダーラ美術の研究に用いられる「ポスト・クシャーン朝期」（４～７世紀）という時代区分を、中央アジア西部（とくに現在のウズベキスタン、タジキスタン、北部アフガニスタン）の美術に応用し、キダーラ、エフタル、西突厥がこの地域を支配する時代の美術を扱うことにする。文献史料の不足により、この時代の歴史は研究が遅れていたが、1990 年代以降、現地語で記された文書や銘文が次々と発見され、活発な研究が行われている。

(2)中央アジア西部の壁画

ソ連邦時代に組織的に行われた発掘により、中央アジア西部のイスラーム以前の遺跡から建物内部を飾った壁画が見つかっている。そのうち、ポスト・クシャーン朝期に制作された可能性のある壁画は、ウズベキスタン南部テルメズ周辺のカラテパ遺跡とファヤズテパ遺跡、少し北のバラリクテパ遺跡、タジキスタン南部のカライ・カフィルニガン遺跡、北部のペンジケント遺跡、アフガニスタン北部のディルベルジン遺跡などで発見されている。壁画に描かれる人物像には、クシャーン朝時代に制作されたカニシカ王を表す石像と共通する特徴があり、従来の研究ではこれらがクシャーン朝期の壁画であるとみなされてきた。しかし、最近の研究では、出土コインの年代や、比較的年代が明確になっているペンジケント遺跡出土壁画との比較などから、これらはポスト・クシャーン朝期の壁画である可能性が指摘されている。

(3)申請の動機

筆者は、これまで主にサマルカンドを中心とするソグドの遺跡で見つかった壁画について研究を行ってきた。ソグド美術は７世紀後半から８世紀前半に頂点に達するが、それを準備したのは６世紀前半のエフタル支配期である。最近の研究では、中央アジアの壁画資料をもとに、エフタル期に流行した服装、冠、佩刀方法などの風俗や、この時代に特徴的な人物表現を特定し、エフタル支配の痕跡を示した。これまでの研究で、たしかにエフタル期には、ソグドのオアシス都市で、それまでになかった独特なファッションや絵画表現が流行したが、それらは先行する時代に存在した服飾や表現方法を部分的に変化させたものではないかと考えるようになった。この考えが正しければ、その源流はクシャーン朝美術である可能性が高い。ソグド美術に飛躍的な発展をもたらしたエフタル期の美術の成り立ちを明らかにするためには、エフタル期を含むポスト・クシャーン朝期の美術を研究する必要があると考えるに至った。

２．研究の目的

(1)壁画の実物調査

中央アジア西部の遺跡で発見され、ポスト・クシャーン朝期に制作された可能性の高い壁画が主な研究資料となる。これらの資料のほとんどは、ウズベキスタン、タジキスタン、アフガニスタンの博物館や考古学研究所で、展示または保存されている。その中には未修復のまま倉庫に眠ったままの断片もある。また、発掘調査時に作成された簡単なデッサンだけが報告され、壁画の鮮明な写真が発表されていない資料も少なくない。したがって、まずは現地に赴き（ただし政情不安のアフガニスタンは除く）、実物資料の現状を調査する必要がある。

1960 年代から 70 年代にかけてファヤズテパ仏教遺跡で発見された壁画は、一部を除いて、40

年間、保存修復処置が行われないまま、ウズベキスタン考古学研究所に保管されている。当該壁画は、ポスト・クシャーン朝期の美術を解明する上で極めて重要な資料であり、研究論文においてしばしば言及されるが、現在のところ、簡単なデッサンをもとに議論が進められている。このような状況を打開するために、筆者は、2016 年 2 月に、連携研究者の島津美子助教とともに、ウズベキスタン考古学研究所を訪れ、研究協力者の Berdimuradov Amridin 所長の協力のもと、ファヤズテパ遺跡壁画の調査を行った。そして、2016 年度から、ウズベキスタン考古学研究所と共同で、壁画の保存修復作業を実施している。保存修復処置が完了したファヤズテパ遺跡出土壁画の高精細写真を撮影し、描起図を作成する。本研究では、それらをもとに、図像の細部を確認し、これまでの研究を再検討する。

(2)供養者像の分析：ポスト・クシャーン朝期の美術の特定をめざして

現地での実物調査をふまえて、壁画の細部を確認し、ポスト・クシャーン期の壁画に共通する要素を見つけ出す。本研究では壁画に描かれた供養者像に注目する。その理由は、第一に、供養者像は時代・地域を問わず描かれる題材であり、比較検討が可能であること、第二に、地元の王侯貴族の姿をモデルとしている可能性が高く、当時の支配者層の服飾や、その時代に特有の表現方法を伝えている可能性が高いからである。イスラーム以前のイランや中央アジア西部の新王朝がコインを発行する際、その図柄（王の顔の向きや頭飾など）には、先行する王朝のコインにはなかった新しい要素が含まれる。したがって、壁画に描かれる王侯供養者像にも、その地域における支配勢力の変化が反映されていると考えられる［影山悦子「中国新出ソグド人葬具に見られる鳥翼冠と三面三日月冠：エフタルの中央アジア支配の影響」『オリエント』50-2, 2007 年］。

また、ファヤズテパ遺跡出土壁画について専論を発表した C. Lo Muzio は、当該壁画にササン朝ペルシアの美術の影響を認め、それを根拠として壁画の年代をササン朝の中央アジア支配以降としている［C. Lo Muzio, “Remarks on the paintings from the Buddhist monastery of Fayaz Tepe”, Bulletin of the Asia Institute 22, 2012］。この点については、その後、十分な検証が行われていない。本研究では、中央アジア西部の供養者像をササン朝初期の摩崖浮彫、銀器に表現された人物像と比較し、ササン朝美術の影響について慎重に検討する。

３．研究の方法

(1)ポスト・クシャーン朝期に制作された可能性のある資料の抽出：対象となる遺跡は、ジャル・テパⅡ遺跡（ウズベキスタン北部）、ファヤズテパ、カラテパ、バラリクテパ遺跡（同国南部）、ペンジケント遺跡（タジキスタン北部）、カライ・カフィルニガン遺跡（同国南部）、ディルベルジン遺跡（アフガニスタン北部）。

(2)壁画の実物調査：ウズベキスタンのサマルカンドとタシケントに出張し、ファヤズテパ、カラテパ、バラリクテパ遺跡から出土した壁画の実物調査を行った。

(3)供養者像の検討

抽出した資料の中から供養者像に対象をしぼり、ポスト・クシャーン朝期の壁画に見られる人物の服飾および表現方法の特徴を分析した。ファヤズテパ遺跡から出土した男性・女性供養者を表す壁画がこの研究を進める上で、最も重要であり、基準となる作例であると考え、当該壁画を重点的に考察した。

４．研究成果

(1)ファヤズテパ遺跡出土壁画の制作年代の再検討

本研究の成果として、第一に挙げられるのは、ファヤズテパ遺跡出土壁画の制作年代に関する先行研究を、新たな資料をもとに検証した点にある。発掘を行った L. I. Al’baum はクシャー

ン朝期の壁画であると主張し、それが支持されてきたが、C. Lo Muzio が 2012 年の前掲論文において、制作年代はクシャーン朝滅亡後の 4 世紀末以降であるとする新しい説を提出した。筆者は、研究開始当初、この新しい説を支持し、ファヤズテパ遺跡の壁画をポスト・クシャーン朝期に分類していた。その理由は、ファヤズテパ遺跡の男性供養者の壁画のうち、上半身だけが残存する壁画が、ペンジケント遺跡から出土し 500 年頃に制作されたと推定される男性供養者の図像と酷似することだった。

しかしながら、ウズベキスタンの考古学研究所と共同で、ファヤズテパ遺跡出土壁画の保存修復と図像研究を進める過程で、同じ遺跡から出土した未発表の壁画を調査する機会を得た。そのうちの一点は仏塔の上部構造を表す壁画で、傘蓋の形状やその荘厳方法にはクシャーン朝期の特徴が認められた。他に上半身半裸の男児を表す壁画も、ガンダーラの石彫の仏伝図などに登場する男児の図像に近い。また、男性供養者に添えられたギリシア文字バクトリア語銘文を、連携研究者の吉田豊教授に見ていただき、その書体は、おおよそクシャーン朝期の特徴を示すことをご教示いただいた。したがって、現在では、ファヤズテパ遺跡出土壁画の制作時期はクシャーン朝期であるとする L. I. Al’baum の説を支持する。

(2)クシャーン朝美術の継承

ファヤズテパ遺跡で出土した男性供養者像と女性供養者像は、どちらも背景の下部（供養者の膝の高さより下の部分）が黒色で塗りつぶされ、丸みを帯びた白い物体が、足もとに描かれる。女性供養者像の背景下部には、さらに、小さな白い五弁の花が複数描かれているのが辛うじて確認できる。立っている人物の膝の高さくらいまで背景を黒色で塗りつぶし、小さな白い花を表すことで、地面を表現し、立体感を出していると考えられる。右壁の男性供養者の背景下部には、小さな白い花を確認することはできないが、劣化や損傷により消失したものであり、当初は描かれていたものと思われる。

Lo Muzio 前掲論文はこのような特徴が 4～5 世紀のメス・アイナク遺跡（アフガニスタン）の壁画にも認められることを指摘している。たしかに、背景下部を黒く塗りつぶし、その表面に小さな白い花（と白い丸みを帯びた物体）を描く表現は、ポスト・クシャーン朝期のディルベルジン遺跡、ペンジケント遺跡などの壁画にも認められる。しかしながら、他にも、クシャーン朝のフビシュカ王の時代に制作されたと推定されている布絵や、ファヤズテパ遺跡と同時代に機能していたと推測されるカラテパ遺跡で最近見つかった壁画など、クシャーン朝期の絵画にも認められる。したがって、この地面の表現は、ポスト・クシャーン朝期の特徴というよりも、クシャーン朝時代に確立した表現方法が、後の時代まで中央アジアにおいて継承されたことを示す貴重な実例であると考えられる。他の中央アジア地域とは異なり仏教が広まらなかったソグドにも、この手法が導入されているのは興味深い。キダーラまたはエフタル支配期にバクトリアからソグドに新しい絵画様式がもたらされ、この表現方法も伝わったのだろう。宗教圏の拡大ではなく、支配領域の拡大を背景として絵画手法が伝播したことを示す一例といえる。

(3)研究成果の公表

①国際研究セミナー・国際ワークショップの開催

2019 年 10 月には、研究協力者の Kazim Abdullaev 教授を日本に招聘し、国際研究セミナー「中央アジア西部の仏教遺跡と出土壁画について：ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画を中心に」を奈良文化財研究所で開催した。海外からの招聘者の他に、考古学、仏教美術史、文献学を専門とする国内の 3 名の研究者にも報告をしていただいた。

2021 年 3 月には国際ワークショップ「考古遺物から見た仏教文化の伝播と交流：古代日本と中央アジア」を名古屋大学で開催し（オンライン開催）、ウズベキスタンの国立考古学センター

（旧考古学研究所）の保存修復家と筆者が、ファヤズテパ遺跡出土壁画の保存修復と研究の成果を報告した。

②報告書の刊行

2021 年 2 月に、本研究の成果を『ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の保存修復と研究』として刊行した。報告書の編集は、ウズベキスタン科学アカデミー国立考古学研究センター、イスタンブール大学の研究者と共同で行い、奈良文化財研究所の研究者の協力を得た。報告書の内容は、ファヤズテパ遺跡における壁画の発見の経緯、先行研究の成果と問題点、新たに公開することのできた壁画の概要、壁画の保存修復作業、壁画片の自然科学的調査、壁画の図像研究からなる。巻末図版として、2019 年度までに保存修復作業が完了した壁画断片の鮮明な写真を収める。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　4件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Etsuko Kageyama	４．巻 -
２．論文標題 Chin-straps with Sogdian-type of crown ornaments	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Живопись Афрасиаба: проблемы изучения, интерпретации и сохранения	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Etsuko Kageyama	４．巻 -
２．論文標題 Xian temples of the Sogdian colonies in China: A study based on archaeological material	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Iran and Central Asia in the First Millenium	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 影山悦子, Berdimuradov Amridin, Kazim Abdullaev	４．巻 2019
２．論文標題 ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画の公表に向けて：2018年度	５．発行年 2019年
３．雑誌名 奈良文化財研究所紀要	６．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 影山悦子, Berdimuradov Amridin, Kazim Abdullaev	４．巻 2018
２．論文標題 ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画の公表に向けて：2017年度	５．発行年 2018年
３．雑誌名 奈良文化財研究所紀要	６．最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 影山悦子，Berdimuradov Amridin，Kazim Abdullaev	4．巻 2017
2．論文標題 ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画の公表に向けて	5．発行年 2017年
3．雑誌名 奈良文化財研究所紀要	6．最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 影山悦子，Marina Reutova	4．巻 2017
2．論文標題 ウズベキスタン南部ファヤズテパ仏教遺跡出土壁画について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 2017年度シルクロード学研究会	6．最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 影山悦子	4．巻 -
2．論文標題 サマルカンド出土「外国使節の間」の壁画	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中央ユーラシア史研究入門	6．最初と最後の頁 58-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 影山悦子
2．発表標題 中央アジアの壁画から見た仏教美術の伝播
3．学会等名 考古遺物から見た仏教文化の伝播と交流：古代日本と中央アジア（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 影山悦子
２．発表標題 ソグドからみた中央アジアにおける仏教文化の広がり
３．学会等名 前近代中央アジアにおける文化の交流と非交流（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 影山悦子
２．発表標題 北朝期の葬具から見た6世紀のソグド人
３．学会等名 第64回国際東洋学者会議（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Etsuko Kageyama
２．発表標題 The paintings of the Shahristan palace compared with those of Pendzhikent
３．学会等名 L'Ustrushana dans l'Antiquite et le haut Moyen Age（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Etsuko Kageyama
２．発表標題 Newly identified Iranian motif of silk textiles in Shosoin storehouse in Japan
３．学会等名 Textile Society of America（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Etsuko Kageyama
２．発表標題 Xian Temples of the Sogdian Colonies in China
３．学会等名 The History and Culture of Iran and Central Asia in the First Millennium CE: From the Pre-Islamic to the Islamic Era（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 影山悦子, Marina Reutova
２．発表標題 ウズベキスタン南部ファヤズテパ仏教遺跡出土壁画について
３．学会等名 ２０１７年度シルクロード学研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 影山悦子、M．レウトヴァ、K．アブドゥルラエフ	４．発行年 2021年
２．出版社 名古屋大学人文学研究科／名古屋大学高等研究院	５．総ページ数 159
３．書名 ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の保存修復と研究	

１．著者名 エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール（著）、影山　悦子(訳)	４．発行年 2019年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 504
３．書名 ソグド商人の歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	アブドゥルラエフ　カズィーム (Abdullaev Kazim)		
研究協力者	ベルディムラドフ　アムリディン (Berdimuradov Amridin)		
連携研究者	吉田　豊 (Yoshida Yutaka) (30191620)	京都大学・文学部・教授 (14301)	
連携研究者	島津　美子 (Shimadzu Yoshiko) (10523756)	国立歴史民俗博物館・研究部情報資料研究系・助教 (62501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 中央アジア西部の仏教遺跡と出土壁画について：ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画を中心に	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 考古遺物から見た仏教文化の伝播と交流：古代日本と中央アジア	開催年 2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ウズベキスタン	国立考古学研究センター			
トルコ	イスタンブール大学			